

ふるさと散歩道 第二二六回

間部詮勝の時代 (四)

— 水野忠邦との対立 —

天保の改革(一八四一)〜(一八四三)

水野忠邦の目指す改革の目的は、貨幣経済の浸透によって疲弊した幕府財政の再建でした。具体策としては「儉約令」を出して贅沢品や華美な衣服を禁止したほか、「風俗取締令」では寄席の閉鎖、芝居小屋の郊外移転、歌舞伎への弾圧を行いました。

経済政策では、「人返し令」を出して、



第12代将軍 徳川 家慶

天保十二年(一八四一)、大御所徳川家斉が亡くなると、老中首座水野忠邦は幕政改革を進めますが、間部詮勝ら西の丸勢力の大名の反発を受け、両者は対立します。

都市部へ流入していた農民を強制的に帰村させ、物価の高騰を押さえるために「株仲間の解散」を命じました。

忠邦の命取りとなった上知令

しかし、これらの政策は経済活動の停滞を引き起こし、かえって物価の高騰を招きました。そこで忠邦は、税収の高い江戸・大坂周辺の大名・旗本領と地方の幕府領を交換するという「上知令」を出しました。ところが、諸大名の猛反発を受け、第十二代将軍徳川家慶は忠邦にこの上知令の撤回を命じました。

実は、この上知令の撤回は間部詮勝らの工作だとする史料があります。

「……誠忠義心の士たる奥の近臣には、中山肥後守死練あり、ついで間部越州陰忠……」

(喜多村香城『五月雨草紙』)



老中 水野 忠邦

つまり、「上知令を撤回させた将軍の側近たちは中山肥後守や間部越州(詮勝のこと)である」というのです。特に、間部越州は陰の忠臣だと言っていますので、国政に関与しない西の丸老中だった詮勝は、水面下で将軍への進言を行ったのではないのでしょうか。

詮勝、西の丸老中を辞任(四十歳)

こうして改革は失敗、水野忠邦は罷免されますが、実は詮勝もその同じ日に辞職願を幕府に提出しています(受理は一週間後)。その理由は「病氣」となっていますが、政敵水野忠邦の失脚を見届けて、自らもけじめを付けたのではないのでしょうか。

「悪法かきの越前どの お心よしの大炊どの 御太鼓持ちの備中どの 見そこなつたの信濃どの きかん気の下総どの」

(『藤岡屋日記』天保十四年)

これは水野忠邦の失脚後に江戸で出されたゴシップ記事で、歴代老中が官位で表現されています。越前は水野忠邦、大炊は土井利位、備中は堀田正篤、見損なつたのは真田幸貫、そして下総(間部詮勝)はきかん気(勝気・強気)だと記されていることから、詮勝の言動が江戸の庶民にどのように思われていたかが偲べれます。

(文化課 前田清彦)

【用語解説】

旗本 ↓ 将軍家直属の家臣団で石高が一万石未満

将軍に直接謁見できる身分の武士

株仲間 ↓ 同業者の組合で、しばしば商品の流通を

独占した

官位 ↓ 朝廷から授与された名譽職で、大名の実

際の所領地や具体的な任務とは無関係。

詮勝は間部下総守である。

大炊 ↓ 大炊頭のこと。大炊寮の長官で、宮中の

仏事・神事の供物を管理する。